
董の空

深見志麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堇の空

【Nコード】

N02631

【作者名】

深見志麻

【あらすじ】

異世界、微恋愛。ナイナリテリユートは公爵令嬢ながら、つましい生活を送っていた。しかし、十二歳になった時、婚約者の存在を父から知らされる。彼は又従兄弟で、更にはとんでもない肩書き持ちだった――。そんな風にして始まっていきなり急展開、一筋縄ではいかない婚約者殿と妙に肝の据わったお嬢様の物語。※異世界ファンタジーな世界が舞台ですが、あまりファンタジー要素はありません。

1. (前書き)

登場人物の言葉遣いや振る舞いには出来る限り気を使っていますが、不適切などころがあるかもしれません。何卒ご容赦を。

1.

お嬢様、と呼ぶ声に聞き覚えがあり、私は額の汗を拭って叫び返した。

「此処よ、エリー！」

程なく、走り寄ってくるエリーの姿が私の視界に入ってきた。

私の母親ぐらいの年齢で、しかも小柄で少しぽっちゃりした体型なのに、彼女の動きは万事素早い。細々とよく働く女性なのだ。私の、所謂ばあやなのであるが、母親の記憶の無い私にとっては本当に母親代わりのような存在だ。

「ああ、お嬢様！ お散歩中…ではないようですね……」

「ええ。リンゴがそろそろ熟してきた頃だから、鳥に食べられてしまいう前に出来るだけ取っておこうと思って」

私はバスケットの中を示す。幹を揺らして、何とか落ちてきたものを入れたのだ。私の背丈では枝に届かないし、木登りも出来ないからだ。

「後でベルを呼んで、残りを取ってもらいましょう。そうしたら砂糖漬けを作りましょうね。これで暫くは食事が少し華やかになるわ」
うきうきしながら私は言う。甘いし保存が効くから砂糖漬けは好きだ。しかもその分の食費が浮くので、更に好きだ。

顔を綻ばせっぱなしの私を余所に、エリーはそつと眉根を寄せた。
「お嬢様、リンゴが当たりでもしたら危のうございます。いつも申し上げておりますが、そういったことは私たちにお命じくさいませ」

「でも私、こういうこと、結構好きなのよ」

本心から私は言う。確かに、もっと大人しく、とエリーたちには耳に聒聒が出来るほど言われていたが、私はこうやって身体を動かして働くことが好きなのだから。

それに、今、屋敷にはあまり人が居ない。その所為で、残りの人

たちは、敷地だけは広い屋敷内をいつも忙しく駆けずり回っている。だから私だって出来る限りのことはやりたい……といえば、エリーは気にするだろうから言わないけれど。

私だって、公爵令嬢としては落第だと自覚している。勉強だけはきっちりしているけれど、こういうことを使用人にきちんと命じることが出来る態度こそ、多分一般的な令嬢としては相応しいんだろう。だが、この状況ではどう転んでも穀潰しにしかねないというところをも意味している。

そう、有体に言えば、私の家は貧乏なのだった。

いつも通り私の言葉に効果は無かったらしく、エリーはいかにも苦言を続けたそうだったけれど、私は先手を打って話を変える。

「ところで、私を探していたのは何故？ 何かあったのではないの？」

あからさまにも程があったが、エリーは本来の仕事を思い出したのだろう。姿勢を正して私に告げた。

「そうでございました。公爵様がお呼びです」

「まあ、お父様が？」

朝食の時には何も言っていなかったので、私は少し不思議に思っ
て首を傾げた。呼ばれること自体はあまり珍しくないけれど、此処
まで前触れらしきものがないのも珍しい。

私はエリーに礼を言ってバスケットを任せ、父の書斎に向けて歩
き出した。

ノックを軽く2回。櫛材の扉は重厚で硬いのだが、その分叩く音
はよく響く。

「ナイナです。お呼びと聞いて参りました」

「ああ、入っておいで」

「失礼します」

断りながら入室すると、父であるティリユート公が、私に向けて
柔和に微笑んだ。ただ、その笑みがいつもより少し硬いように感じ

る。

「何事かあったのですか？」

「いや……お前に話しておかなければならないことがあって、な」
話しておかなければならないこと。

まさかこの上領地が不作だとか、そういう不吉な知らせでは。

身構えかけた私に、父は殊更明るい声を作った。

「お前の婚約者様について、だ」

「……………は？」

肩透かしを食らったような気分になる。何だそんなことか、と思いかけてはたと気づいた。

「失礼ながら、お父様、私はそのようなお話を聞いたことはございませんけれど」

「う、うむ、すまん……その、言いあぐねていてな……」

「いえ、ただ、驚いてしまっただけ」

うろたえる父に、私は頭を振る。責めるような言葉になっちゃったが、抗議のつもりはない。本当に知らなかったのだ。むしろ私は自分が婚約しているだなどと想定したこともなかった。

「けれど、どのような方なのでしょう？」

ティリユート公爵家は、過去に皇族の女性も何度か降嫁したとされる、名門貴族だといえる。だから家柄だけなら割と良いほうだといえよう。

ただ、少し病弱で善人過ぎる父は、魑魅魍魎の跋扈する宮廷を渡りきれず、何だかもみくちやにされているうちにあるだけ搾り取られてしまったらしい。今のティリユート公爵家は下手をしたら下級貴族ばりの財力しか持たず、公爵家とは名ばかりである、ということとは、いくら子どもの私でもちゃんと理解している。財力はあるから箔をつけたいという人以外、そんな貴族と婚姻関係を結ぼうなどという物好きが、そうそう居ると思えないのだけれど。

と、見も知らぬ婚約者について非常に失礼なことを考えていた私に、父は思わぬことを言った。

「お前の婚約者様は、お前の母方の又従兄弟に当たるお方だ」

「……………は？」

正気ですかお父様、とは流石に失礼なので飲み込んだ。ご冗談を、と笑い飛ばすには、父の表情は真剣すぎる。

母方の又従兄弟といえば、つまり亡き母の従姉妹の方の御子息、ということになる。そして私の知る限り、該当する方はお一人だ。

私の思考を読んだように、父は追い討ちを掛けた。

「ナイナ。お前は、アルクウェイ様と婚約しているのだ」

アルクウェイ様。私より五つ年上の、又従兄弟。

そして——皇帝陛下と、先日お亡くなりになった正妃殿下の間に
お生まれになった、第一皇子殿下のこと、である。

何故そんなことになったのかと言えば、そもそも母親同士の話に
遡るらしい。

私の母と正妃殿下はとても仲が良く、殆ど姉妹同然の間柄であつ
たそうだ。そして、年が近かったために、ほぼ同時に嫁ぎ先が決ま
ったらしい。

公爵夫人と皇帝の正妃では、これからは会うこともままならなく
なる。姉妹のような存在との別離と、嫁ぐことに対する希望と不安
により、こんな約束を交わしたそうだ。

——私たちが生む子どもたちがもし男の子と女の子だったら、二人
を婚約させましょうね。

それは本当に他愛の無い口約束でしかなかったはずなのだ。住む
場所も立場も離れても繋がっていくことはきっとできる、というお
互いへの励ましとして出た言葉だったのだろう。母とて、それが現
実になるなんて信じていたとは思いがたい。

しかし、正妃殿下は先日お亡くなりになる直前、御子息であるア
ルクウェイ殿下にそのことを伝え、従姉妹の忘れ形見である私をど
うか頼む、と言い残されたのだそうだ。

それを受けて殿下は正式にこちらに申し入れ、父はそれを受けた、

とそういうことらしい。

「…………お父様…………」

「いや、お前にも言うべきだとは思っていたのだが…………」

「分かっております。殿下からのお話ですもの、お断りするわけがありません」

というより、皇子殿下の仰せをはねつけられるわけがないと言ったほうが正しい。常識的に、無理だ。貴族の娘として結婚が思う通りにならないだろうということはとつくの昔に分かっていたことだから、婚約者の存在については特に反発も覚ええない。勝手に返事をされたことには少し思うところが無いでも無いが、父はこのような好機を逃したくはなかったのだろう。

「そうか！ いや、良かった…………殿下は素晴らしい方だという。お前にとっても悪いことにはなるまいよ」

私の返答に、父はあからさまにほっとして喜色を示す。

確かに、アルクウェイ殿下については、基本的に悪い話は聞かない。『身体は丈夫なほうではないが、穏やかで気取らない性格で、先見の明がある、聡明な人』——アルクウェイ殿下について、私が知っている噂をまとめると、大方こういうことになる。その上、非常に有力な皇太子候補と見なされている。

しかし、良い話過ぎて浮かれる気にもならない、と思う私は少しひねくれているのだろうか。

「あの、お父様…………それで、殿下は何故私と婚約してくださったのでしょうか」

「うむ？ それは先程言った通りに」

「いえ、そうではなく。これではあまりにも、私たちに有利すぎます」

結婚とは、貴族にとっては駆け引きの一種だ。となれば、皇太子候補が名ばかり公爵令嬢を娶る利点が何処かに存在するべきなのに、私には全く思い至らない。

「殿下は親孝行でも知られた方だ。お母上のご遺言の一つを無碍には出来なかったのだろう」

聡明で知られる方が、それだけで？

疑問には思うが、善人過ぎるところのある父はあまり問題にしていけないのが丸分かりだ。此処であまり追及しても意味が無いだろう。「……分かりました。それで、殿下にはいつご挨拶に伺えばよろしいのでしょうか」

「お前は話が早くて助かる」

人好きのする笑みを浮かべて日程について話し始める父を見ながら、私はそっと息を吐く。

殿下が実際にはどんな方か、どのような意図を以てこの婚約を申し出なされたのか——直接お会いすることで見極められれば良いのだけれど、生憎と私にそんな自信は無かった。

1. (後書き)

読んでくださってありがとうございます。のんびり続けていきたい
と思っておりますので、よろしく願います。

2. (前書き)

まず、もしこんな話の続きを待っていてくださった菩薩のような方がいらっしやったなら、非常に遅くなつてすみませんでした(土下座)。

それから、今回から小難しい感じの話が連続になりますが、割と適当です。詳しい人が見たら突っ込みどころ満載だとは思いますが、その辺は笑ってご容赦くださるよう、よろしくお願いいたします。

2.

面会のために通されたのは、アルクウェイ殿下に与えられた離宮の客間の一室であった。

広々とした空間にたくさんの調度が並んでいる。それでもごてごてした印象にならないのは、空間全体の均衡を考えた上で品の良いものを配置しているからだ。しかし、何よりも父の屋敷と違うのは、手入れがきちんと行き届いていること。部屋を構成するものはどれもこれもつやつやに磨かれていて、少し気後れしてしまうほどだ。それは父も同じなのだろう、先程からそわそわとして落ち着きが無い。

「……何かあったかい？」

「いえ。素晴らしいお部屋だと思ひまして、見惚れておりました」
ぼうっとしていたのが見破られたらしい、向かいに腰掛けた青年に微笑みかけられて、私は急いで微笑み返す。あまり本心から離れていないことなので、言い訳としてはまあ良いほうかもしれない。

「それは光栄だね」

向かいに座るアルクウェイ殿下の微笑みは、噂通りの穏やかそうなものだった。白皙の容貌はただでさえ温和そうに整っている上、皇族特有の深い蒼の瞳が柔らかに細められる様は非常に落ち着いた印象がある。きっちりとした服装なのに礼儀正しい印象を強調するだけで、堅苦しい感じは無い。さぞかし人気があるんだろうなあ、と他人事のように思った。

「ところでナイナ殿、そう畏まらなくて良いんだよ？ 私たちは婚約者同士なのだからね」

「……善処いたします」

でも、あんまりしたくない気がする。

綺麗な花には棘がある、それが鉄則というものだ。困った顔で苦笑する殿下を見ていると穿ちすぎかもしれないとは思いつつも、

殿下に対する警戒心が一向に抜けない。我ながら嫌な子どもだ。

——だから、賭けに出る。

私は紅茶のカップを置いた。

「お人払いをお願いしてもよろしいでしょうか」

「ふむ。私と君だけ、ということかな？」

「ナイナ！」

殿下の言葉に頷くと、慌てたように私を咎める父の声がした。嫁入り前の娘がどうのこうのと言いたいのかもしれないが、私としてはこれからの話を一番聞かせたくないのは父なのである。次いで殿下のお付きの皆々様、の順になる。

「ご心配なく。ほんの少しの間だけですわ」

「そうだね。余人が居ないほうが気楽に話せることもある。……失礼になりましたようが、少々お待ちいただいてもよろしいでしょうか、公？」

殿下に言われると反論できないらしい。父はまだ戸惑いを残した目で私を見ながら、促されてゆっくりと退出していった。控えていた殿下のお付きの方々も、合図と共に下がっていく。

「話とは、何かな？」

「……まず、殿下さえよろしければ、注意すべき人物と信頼できる人物を教えてくださいませんか？」

殿下は、秋の高い空のような色をした瞳を、小さく瞬かせた。私は紅茶のカップを持ち直す。

「殿下と私の婚約発表もなされました。これから、ティリユート公爵家は否応無く衆目に晒されることとなりますでしょう」

そして、私が成人する三年後には、殿下と私の婚姻関係が結ばれることになる。

元々は名門とはいえ、ティリユート家は長らく中央から遠ざかっていた。そんな家の娘がいきなり第一皇子の妃として名前が挙がったのだ。この知らせは、他の貴族たちにとっては青天の霹靂となるに違いない。それで皇太子有力候補の妃となる人間に取り入ろうと

思うか、或いは邪魔に思うか、分からないけれど。

「ご存知の通り、私は領地の屋敷を離れたことは滅多にございません。宮廷での生活から遠ざかって久しい父では、現在の動向を読むことは難しいでしょう。ですから、殿下のご意見を拝聴させていただきたいのです」

加えて父のあの性格だ。きちんと注意しておかなければ、あつと言う間に再び潰されるだろう。

注意しなければならぬ。甘い言葉に惑わされないように、悪意に陥れられないように。誰も助けてくれないような状況になる前に、見極めておかなければ、今度こそとんでもないことになる。

私はじつと殿下を見つめた。青年は暫く驚いたように私を見ていたが、すぐに破顔一笑した。

「……私とはとんでもない女性を妻にしようとしているらしい」

「世間知らずの小娘が必死になっているだけですよ」

私はさつき自分で殿下に言った通りに、宮廷の姿を知らない。僅かに母の残した日記や父の昔話、そして一応欠かしたことの無い勉強でその実態を知るだけだ。現場で上手くやっていく自信なんて何処にも無い。本当は、領地でリングを砂糖漬けにしているような生活が見合っているんだと思う。

だけど私は殿下の婚約者をきちんとやっていかなければならなくなったのだ。だったら必死でやらなければ。

「私の意見で構わないのかい？」

「殿下は聡明な方です。加えて、生まれた時から宮殿を渡っておられる。殿下以上の繋がりや、私は持ちません」

「私を信用しても良いのかい？」

殿下ははんなりと微笑んだ。私の警戒はすっかり伝わってしまったらしい。しまったと思いつながらも、極力態度に出さないようにと抑えて続ける。

「婚約者の失態は殿下の醜聞に繋がります。私に誤った見解を伝えるようなことはなさらないはずですよ」

「例えば、何らかの理由で私が君を排除したいとしたら？」

言われて、考え込んだ。

それは、確かに、無いとは言えないことだ。正妻として迎える候補はいくらでも居た筈なのに、母君のご遺言でその計算が水の泡になったとなれば、一度は婚約しておいて、後で何か適当な理由をつけて解消する、という手段を取るのも、ありえない話ではない。先程私はあ言ったが、殿下にさして傷がつかない手段など、いくらでも存在する。

けれど、私は顎を引いて、殿下に目を合わせた。

「その時は運が無かったと申し上げましょう。先程も申し上げました通り、私には殿下を信頼し申し上げることからしか、始められないのです」

私は信じなければならぬのだ。前提が無ければ歩き出せない。歩いた先がとんでもない方向になっていたとしても、その時はその時、私たちの運が無かったただけだ。

その言葉に、殿下は静かに笑みを深めた。何故か満足そうだ。

「君は度胸がある。頭も良い。……聞いていた以上にね。そんな君はこの婚約を怪訝に思っていたのではないかな？」

迷いながらも、結局頷くことにした。知りたかったことに向こうから切り込んでくれたのだ、良い機会かもしれない。

「殿下と私では、この婚約により得る利益があまりに不均衡です。不躰ながら、私が婚約者になることで殿下は一体何を得られることになるのだろうか、考えておりました」

「それを話す前に、まず言うっておこう。私は決して君を馬鹿にしていたわけでも、君の父上を軽んじているわけでもない。言ってみれば、君たちが一番適役だと思ったからこそ選んだのだと」

殿下は両手を組み、顎を乗せる。そういう仕種ですら流れるように行うから、非常に優雅な所作に見える。

「第一に、私は方々からの様々な令嬢の売り込みにそろそろうんざりしてきた頃だったんだ。婚約者を見繕わなければならぬだろう

と考えていた時に、母の言葉だ。調査をしてみれば、なかなかしつかりした、頭の良いお嬢さんだというじゃないか。不謹慎だが、渡りに船だとも思ったよ」

私は余程納得のいかないという顔をしていたのだろう。殿下は僅かに目を細めてから、静かに続ける。

「第二に、君たちは宮廷の権力争いとは殆ど無縁だからね。あちらを立てればこちらが立たぬ、が当たり前の世界で、一番中立に近いところに居るんだ。しかも、家柄として申し分が無いから、表立っての反発は誰も出来ない」

今度は、納得を込めて頷いた。他に隠している理由が無いとも限らないが、とりあえず信じられることを教えてもらえたと思う。

殿下の妃の座は、野心がある貴族なら殆どが狙っていただろう。野心家同士のぶつかり合いに巻き込まれることを避けたいのなら、いっそ私を考えても其処まで変ではない。その上、父のあの性格なら、義父だからと言って殿下に圧力を掛けようとしたり、私に子が生まれたならば皇帝の祖父として実権を握るために根回しを始めて、ということとはとてもではないが出来ないだろう。つまり、面倒は少ないけれど良い家柄の娘として求められた、と。

殿下は最初にああ断ってはくれたが、腹は立たない。私も少女の端くれなので御伽噺のような恋に憧れが全く無いとは言わないが、私とは縁の無いことで、どうせ貴族は家名で結婚するようなものだと割り切れていると思う。調査書越しとは言え『私』をある程度評価した殿下には、むしろかなり良心的な手段を踏んでいてくれたことに感謝したいぐらいだ。

「此処に来て、第三の理由が出来たけれど」

「何か、ございますでしょうか」

「君と話すのは想像以上に楽しい。退屈しないよ」

にっこりと笑う殿下に、私は内心で首を捻った。機知に富んだ話なら、私よりずっと上手く出来る人がたくさん居る筈だ。だが、殿下は微笑む。

「言っただろう？ 君は度胸があつて、頭が良い。気の利いた言い回しの仕方に振り回されて、言いたいことがはっきり伝わらないような物言いはしない。何より、頼みごとをしようとも信じると発言しようとも、態度があくまで誠実なのであり媚びようとはしていないから、気楽だと感じる」

「……光栄でございます」

褒めてくれたことは素直に嬉しい。変わり者だからと言われている気もしないでもないが、それはそれだ。

私も、この殿下がどうにも嫌いにはなれそうにない。見た目よりもずっと曲者のようではあるけれど、嫌な感じがしないのだ。きっと、表裏にして抑えているわけではなく、出す場面を選んでいるのだろう。それならば私たちが普段やっていることと変わりは無い。それに気づいて、信じよう、と思えた。信じなければならぬのではなく、この人を信じてみよう。

「これからよろしく頼むよ、ナイナ」

だから、笑顔で差し出された手を、私は握り返した。骨ばった手は、私より少し温度が低かった。

あまりにさらりと言われた上に違和感が全く無かったので一拍遅れたが、そういえば呼び捨てだったな、と気づいた。

2. (後書き)

読んでくださってありがとうございました。

前書きで土下座モノだと書いておいて心苦しいですが、結局変わらずのんびり連載になると思います。どうかお付き合いくださいませ。

3. (前書き)

やっぱり色々フィーリングで書いています。ご容赦を。

3.

信頼できる人物として、殿下が真っ先に名を挙げたのがクロウヴイス伯爵だった。

貴族とは言え、どちらかといえば政治よりも軍事関係に長けた一族だと聞く。優秀な武將を数多く輩出しており、現当主のクロウヴイス伯爵も有能な方で、それ以上に人格者であると。アルクウェイ殿下にも非常に友好的であるが、皇太子争いの場からは一歩引いた立場であるらしい。最も帝位から遠いと言われるアヴィ殿下の、実質の後見のような立場であるからだとか。

そのご長女が、セレスティアナ・クロウヴィス嬢。私より一つ年上の少女だった。

まっすぐに流れる金髪と吸い込まれそうに碧い瞳、化粧の匂いは殆ど無いのに白い肌に薔薇色の頬。巖のようなクロウヴィス伯爵とは全く似ていない、美しい少女だった。きびきびした小気味良い所作は、とてもよく似ている父娘だったけれど。

とにかく、私に向ける視線は、なるほど全く敵意も打算も無い。殿下の婚約者になってから殆ど初めてのお茶会なのでやはり緊張していたのだが、相手が彼女で良かったと素直に思えた。

「宮廷の作法には不慣れなのです。無作法があればお許しくださいませ」

一応、そう断っておく。一通り勉強はしてあるが、何しろ実践の場が少なすぎたので、どれほど上手く振舞えるか、分からない。

「あら、それは私も同じです。社交の場は少し苦手で……剣を振るっているほうが、私の性に合っているようなのです」

剣、と聞いて私は目を瞬かせた。そういう反応には慣れているのか、セレスティア嬢は微笑んだままである。

いくら武人の家系だからといって、こんな可憐な少女が剣を嗜んでいるのだろうか。

「父の方針なのです。女の身なれど、守るために剣を学ぶのは決して無駄では無い、と。それが存外性に合ってしまったているようで：貴族の娘としてはおかしいことなのでしょうけれど」

おどけるように微笑んでみせる彼女だったが、私は好感を持った。私自身、正統派のお嬢様とは言いがたいからだ。

「私も、庭師の真似事をするのが好きなんです。庭の花や果樹を世話しては、守り役たちに叱られてしまっ」

冗談めかして告げると、今度は彼女がその碧い瞳を睜り――ややあって、にっこりと微笑んだ。

「私たち、仲良くなれそうだと思いいになりませんか？」

その澄んだ水のような色の瞳に嘘偽りは映っていないと感じ、私は心からの同意と共に頷いた。

セレスティナ嬢――ティナとは、そのまま急速に仲良くなった。

最初に予感したとおり、私とティナは結構感性が似ていたのだ。ドレスよりも動きやすい服装が好きだとか、華やかな社交の場は苦手だとか。なかなか予定をあわせるのも大変ではあるが、感性の似た友人に接する機会が出来て、気分が一気に楽になったのも事実だ。

そうして、いつの間にかや下との婚約発表から一月半が経っていた。その頃には徐々に近寄らないほうが良い人とそうでもない人の区別が分かるようになった。それなりにあしらい方も学習したし、多少の嫌がらせには動じなくなった。随分と慣れたといえるだろう。人間やれば出来るものだ。

私はその日も、何とか時間をやりくりして、部屋に付属したテラスでティナとお茶会を開いていた。一対一で話せるのはほぼ一週間ぶりであったために、ちょっとした相談事から他愛ないおしゃべりまで、話したいことは尽きなかった。

しかし、その時、近くの茂みがかさりと不自然に音を立てた。いつもは優しいティナの瞳がすうっと鋭くなり、私を庇うように立っ

て警戒態勢に入る。折り悪く給仕の人たちも席を外したところだったので、誰かを呼ぼうと口を開きかけた時。

「おっと、失礼。騒がせてしまったか？」

そんな言葉と共に、茂みから少年が這い出てきた。私と同年代のように見えたが、私たちを見上げた表情は人懐こく、邪気が無いので幼く見えるだけで、実際は二つ三つ年長かもしれない。

けれど、何より目を奪われるのは、瞳の蒼。高く澄んだ秋空のような色は、アルクウェイ殿下と同じ、だ。皇族特有の瞳を持っているということとは。

「アヴィ殿下……何をしてらっしゃるのですか？」

ティナがほっと警戒を解き、礼を執った。私もそれに倣いながらも、目を瞬かせる。

アヴィ殿下は第五皇子に当たる方だったはず。ただ、母君が元々女官、それも庭師の手伝いをする程度しか許されない身分だったこともあって、帝位から最も遠い立場にあるという。母君がクローヴイス伯爵の領地の出身だった縁で、伯爵が実質の後見のような存在であるらしいので、ティナが一目で分かったのも頷けようというもののだ。

だが確かに、どうして殿下がこんなところでかくれんぼのようなことをしているのだろう。

「久しぶり、セレスティナ嬢。いや何、ちょっと散歩中なんだ」

「つまり、また弟やニケーア殿の目をかいくぐって抜け出しているっしやる、と」

ふう、とティナが覚えぬ漏らしたのだろう溜息が風に溶ける。脱走中らしいと悟り、私は大丈夫なのかと思わず彼を見る。彼は私に気づくと、屈託の無い笑みを深めた。

「そちらの方は、初めまして、で良いのかな」

「初めまして、殿下。ナイナⅡティリユートでございます」

「ああ、アル兄上の許婚の方ですね。これは失礼致しました、アヴィⅡサクカです」

アヴィ殿下の笑みには影が無い。謀略の匂いが無いというのもあるけれど、翳りとでいおうものも無い。

彼は、宮廷では非常に不遇な立場だと聞く。母君の身分が他の兄弟たちに比べて飛び抜けて低く、後見の伯爵にしたって、軍事ならばともかくも政治的な場面での発言力は殆ど無いことで、兄弟の殆どからは軽んじられている。傍付きの人間も、大抵は能力こそ非凡であるものの何か事情があるという人物が殆どのようなのだ。けれど、そういった扱いに対する鬱屈など、一切見られない。得難い人、なのだろう。

そういえば、アルクウェイ殿下が言っていたか。

『私の弟妹たちには気をつけなさい。アヴィ以外は、あまり君に良い感情を持っているとは言いがたいから』

いくら血を分けた兄弟とはいえ、帝位を狙う上では単なる敵だ。その敵に嫁ぐ予定の私にもあまり良い感情は持っていないのも当たり前だろう。

けれど、何故アヴィ殿下は除外できるといえるのか。そう問うと、彼は優しく笑った。

『あの子は今のままでは帝位を望めない、そして望んでいない。それが心からのことなのは、もう証明されている。……それにね、あの子は拗ねたところが全く無い』

彼の明るい瞳を見ると、確かに本当のことなのだろうと思える。これなら気兼ねなく兄弟として付き合えるだろう。安全なアヴィ殿下なら弟扱いできる、という打算だけではなく。

「兄上を、よろしく願います」

こう言って笑える人だから、弟と呼べるのだろう。

「私がお世話し申しなければならぬような方ではいらつしやらないようですけれども、精一杯、努めさせていただこうと思います」

「ご謙遜なさらずとも。この間、アル兄上に盛大に惚気られましたよ。とても聡明で、けれど可愛らしい方だと」

それは惚気じゃなくて、世辞に近いのではないだろうか。どちら

も私にはちよつと遠い言葉だ。

けれどそれを見透かしたように、アヴィ殿下はにっこりと笑った。「兄上はなかなか許婚を決めようとはなさらなくて。周囲がせっつくものだから、余計に慎重になっていらした。その兄上がああまで褒める方なのだから」

ああまで、とはどれぐらいなのだろうかと思うと自然頬が熱くなる。どの程度にせよ、恥ずかしいから止めて欲しい。

「貴方はもっと自信を持っても良いと思います。なあ、セレスティナ嬢？」

「そうですね。少なくとも、努力の量に見合うだけの自信は持っていただくべきだと、私も思いますわ」

「……ありがとうございます」

二人の言うことは、確かに尤もだった。立場上、もっと自信をもつて振舞うべきだし、努力してもそれがつかないとなれば、ティナを始めとした付き合ってもらっている人たちに悪い。

改めて頑張ろうと心に決めた私の耳に、遠くから呼び声が聞こえた。

「殿下！ アヴィ殿下！ 『息抜き』もそろそろ終わりにしてくださいませ！ 殿下！」

まだ少年のような声が、茂みを掻き分ける音と共に近付いてくる。かなり苛立っているらしいと、その音だけで察することが出来る。

不味い、とアヴィ殿下は呟くと、私たちに向き直った。

「ではセレスティナ嬢、ナイナ殿、いづれまた！」

輝くような笑顔を残し、彼は再び茂みの中に消えた。あまりにも素早い動きを呆然と見送っていると、すぐに別の人影が現れた。

濃い茶色の髪の少年は、体格からして私より少し年下だろう。だというのに、眉間にきりきりと皺が寄って、随分と険しい顔付きになっている。きよろきよろと辺りを見回して、私達を認めてぎよつとした様子を見せた。

「あ、姉上！？」

少年も驚いていたが、私も驚いた。ティナの弟がアヴィ殿下に仕えているという話は聞いていたものの、印象も顔立ちも髪や瞳の色も全く違うものだから、言われなければ分からなかっただろう。

対するティナのほうは、少年の声が聞こえた時から覚悟はしていたのだろう、驚いた気配すらなく微笑んだ。

「殿下を探しているの？ 先程までいらっしゃったわよ」

「それでどちらへ!？」

勢いよく反応した少年に、ティナが最後に茂みが鳴ったほうを指す。慌しく礼を言って、少年は再び駆け出した。

「……良かったの？」

「あら、殿下は言うなどはお命じになれなかったのだもの。大丈夫よ」

「…それはそうね」

詭弁と言えばそれまでだけれど。口止めより逃亡を優先したのが運の尽きということか。

私は、仕切りのおすように呟いた。

「アヴィ殿下は、元気な方だったわね」

「でも、良い方だったでしょう？」

ティナの言葉に、素直に頷いた。元気で、微笑ましくて、良い方——それが、私のアヴィ殿下に対する印象だった。

その時の私は、何だかんだ言いながら、未来はこの先に自動的に続くもののだと信じていた。

これからの嵐のような展開なんて、全く想像していなかったのだ。

3. (後書き)

久々に続きです。こんな小説を待っていてくださった方、いらっしやったら本当に申し訳ありませんでした。あと、新キャラ続々でごめんなさい。とっとと出しとかないと後が詰まるので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0263i/>

董の空

2010年10月17日12時33分発行